

表紙の解説 日本眼科学会の創立—大西克知の奮闘—

谷原 秀信



(九州大学眼科所蔵)

図1 大西克知の肖像



(大西克尚所蔵)

図2 第1回日本眼科学会総会の集合写真(明治30年2月28日)

はじめに

我々が現在所属している日本眼科学会の創立は、明治30年(1897年)でした。それに合わせて同年、日本眼科学会雑誌も刊行されました。日本眼科学会の創立にあたっては、初代の会長であった河本重次郎に加えて、川上元治郎、須田卓爾、宮下俊吉、そして大西克知らの尽力がありました。その中でも、特に中心的な立場で奮闘したのが福岡医科大学(後年の九州帝国大学)の初代眼科教授であった大西克知(“おおにしよしあきら”と読みます)です(図1)。大西克知は、ドイツ留学で学位を取得して、河本重次郎と彼が率いた東京大学眼科とは別個に、独自の学問体系を築き上げた大学者であるとともに

に、かなり独特な性格によって強い印象を周囲に残しています。今回は、日本眼科学会創立の立役者であるこの人物を題材に取り上げたいと思います。今回の表紙に掲載した一葉の写真は、この大西克知が創立に尽力した第1回日本眼科学会総会の集合写真です(図2)。

大西克知の生涯

大西克知の生涯については、日本眼科学会百周年記念誌編纂委員会編「日本眼科を支えた明治の人々」「大学眼科の歴史」における彼に関する記述から抜粋します。大西克知は、慶応元年(1865年)1月6日、伊予松山で大西克育の次男として誕生します。その後、明治17年に東

京大学予備門に入学し、翌18年にはドイツに私費留学をして、ハレー大学、次いでチュービンゲン大学でナーゲル教授の指導を受け、明治22年、メディチナ・ドクトーレの学位を取得して、明治23年に帰国しました。この際、河本重次郎と同じ船で渡航したと記録されています。同年、岡山にあった第三高等中学校の医学部眼科学教授となり、県病院眼科医長を嘱託されています。この頃も、学生の教育には非常に熱心であったといわれています。明治28年に第三高等中学校を辞して、東京都神田錦町にて大西眼科医院を開業します。この時、門弟の正田直太郎、林原貞吉郎も、岡山から移って、大西眼科医院の助手を務めていますから、一門にとっての大きな転身であったようです。さらに、明治32年には、東京大学に論文を提出して、東京大学から学位を受けました。

明治36年、勅令をもって福岡医科大学設置が公布され、同年眼科学講座の開設が定められました。当初は眼科専任の教授がおらず、2年後の明治38年、大西克知が、京都帝国大学福岡医科大学(現在の九州大学医学部)教授となることで、正式に眼科専任の教授となります。翌明治39年には、同大学附属医院長になり、明治44年まで医院長を務めました。大正8年に官制改正により九州帝国大学教授となり、大正14年、日本眼科学会々長、大正15年には九州帝国大学を定年退官して、同大学の名誉教授となりました。昭和7年(1932年)に他界します。

大西克知は、多数の門弟を育成します。その高弟の一人が北海道大学眼科の初代眼科教授となる越智貞見です。大西克知の長男・克治は、眼科医となり、この越智貞見に師事します。さらに克知の三男・克保は、越智貞見の長女を娶るのですが、誕生した克保の次男・克尚が伯父・克治の養子となります。大西克知の嫡流を継承した大西克尚は、眼科医となって、後年、和歌山県立医科大学の第4代眼科教授となりま

す(現 和歌山県立医科大学名誉教授)。

日本眼科学会の創設

大西克知の功績としては、やはり日本眼科学会の創設と日本眼科学会雑誌の発刊といえます。その経緯については、日本眼科学会百周年記念誌編纂委員会編「日本眼科の歴史 明治篇」に詳細な記載がなされていますので、これを抜粋させていただきます。

明治28年12月、岡山の第三高等中学校を辞して、大西克知は、東京神田で開業しますが、明治29年2月に開業した須田卓爾とは、同時期に開業した誼もあり親交が深かったようです。須田卓爾は、本シリーズでも取り上げた須田哲造(第六回「ライバル達の相剋—井上達也と須田哲造—」)の姪を娶り、須田家を継承しています。明治25年にはドイツのハイデルベルク大学に留学した後、帰国して、須田哲造が設立した明々堂院長となっていました。したがって、最新のドイツ医学を学んだ眼科医同士として、二人の意見や問題意識が合致したのであろうと思います。両者に加えて、川上元治郎も、よく会食して意見交換をしていたのですが、ドイツで隆盛を誇っていたハイデルベルクの眼科学会に相当する学会が、日本にも必要であると意見が一致したといわれます。川上元治郎は、この頃京橋で開業していたのですが、「日本医事週報」を刊行して、医政を論じていました。川上元治郎は、須田哲造に師事していたので、須田卓爾を通じて、識見の高い開業医同士として、両者との交流があったと思われます。その後、先輩眼科医であった宮下俊吉(彼もドイツ留学経験者です)、保利貞直、桐淵道齋などの同意を得て、東京帝国大学の初代眼科教授である河本重次郎に会長就任を要請しますが、河本は、当初、学会の持続性を疑問視して、また大学から提供できる資料が乏しいことなどを考えて、

時期尚早として開催に反対していました。しかし、河本重次郎と東京大学眼科の協力なしでは、眼科学会の設立が難しいと考えた大西、須田、川上らは、河本重次郎に対する熱心な説得作業を継続して、ようやく河本重次郎の了承を得ることができました。こうして明治29年の夏、日本眼科学会創立の趣意書が作成され、全国の約550名以上の眼科医に配布されました。そして同年12月、雪の降る中、神田錦町(大西眼科医院の所在地)の洋食屋に14人が集まって、第1回の創立準備会が開催されました。この時、翌明治30年2月27日に第1回総会を開催することが決定されました。

明治30年2月27日午後1時、日本眼科学会の第1回総会は、川上元治郎の開会の辞で始まります。その後、最初の学会長として、河本重次郎が約15分間にわたる開会の演説を行いますが、この挨拶において、新学会の隆運を祝い、眼科医のこれからの気構えを説きつつも、学会開催の準備に多大の貢献があった大西克知に対して謝辞を述べています。次に、川上元治郎による経過報告、そして創立に尽力した須田卓爾、宮下俊吉の祝辞、熊谷謙の祝詞(代読 大西克知)、大西克知による祝電披露、一野辺省三、河東高之の祝詞、甲野栞による閉会の辞で、2時間半におよぶ発会式が終わり、その後、両国の亀清楼で懇親会となります(図2)。この懇親会においても、須田卓爾の開会の辞、川上元治郎の挨拶などに続いて、懇親会の最後に、須田卓爾が大西克知の奮闘を讃えて彼のために乾杯して、大西克知の万歳三唱で締めとされています。そして翌日2月28日、講演と病院参観、議事などが行われますが、大西克知は「トラコーマの手術療法」について講演しています。また明治41年には、大西克知の主宰で、第12回日本眼科学会総会が福岡医科大学(後日の九州帝国大学医学部で、現在の九州大学医学部)で開催されました。この際、大西克知自身は、

総会長(司会)を務めるとともに、「神経麻痺性角膜炎の後報」と「蚕食性角膜炎療法」について講演しています。

『日本眼科学会雑誌』の創刊

眼科雑誌の発刊については、明治26年、大西克知が、姫路の井上通泰、京都の浅山郁次郎、大阪の今居真吉らと規約草案を練り、日本で最初の眼科関連の雑誌である『眼科雑誌』を岡山で創刊しています。この雑誌の発行同人は、大西克知が務め、雑誌が発刊されると、大西克知がほとんど独力で外国論文を紹介し、また自ら論文を執筆したといわれます。この雑誌は大西が第三高等中学校医学部の眼科教授を辞し、東京で開業した後も、須田卓爾、川上元治郎、小川劍三郎らを共同編集者として発行を続けます。明治29年、『眼科雑誌』は、第3巻で廃刊として、大西克知が主導し、須田卓爾、川上元治郎が協力する形で、明治30年、『日本眼科学会雑誌』創刊へと発展するのです。これ以降、大西克知の京都帝国大学福岡医科大学の教授就任後、(福岡医科大学が改称した)九州帝国大学を退官するまで、日本眼科学会雑誌の編集・校正作業のすべては、大西克知がほぼ独力で行っていたといわれています。

大西克知の人柄—誤解されやすかった直情径行の人—

大西克知を評する際には、彼のユニークな言動について言及されることが多いようです。たとえば、石原忍は、大西克知について、「先生ハ頗ル眞面目ナ學者風ノ方デ、世間デイフ奇人トカ變人トカイフ型ノ人デアラレマシタ」と述べています(石原忍「大西先生ノ功績」日本眼科学会雑誌第36巻、昭和7年)。さらに河本重次郎は、「私ハアノ人ハ結晶ミタイナ人ダト

思ッテ居リマス。結晶ハ細イ所マデ結晶シテ居ル。大西君ハドウモ結晶ト伝フ評ガ一番ヨク合ッテ居ル人デアリマス。何處マデモ結晶シテ居ル人ダト思フ」と追悼しています(河本重次郎「追悼ノ辞」同上)。

上記の石原 忍や河本重次郎の追悼辞では、東京大学閥の立場から、ある意味では在野の人であった大西克知を評したものです。もちろん大西克知は、九州帝国大学教授という公職に就いていますので、厳密な意味では「在野の人」でないのですが、当時の正統な権威者であった河本重次郎などからいえば、「初メカラ大學ニ入ラナイデ中学カラヤラレタ」(河本重次郎「追悼ノ辞」)大西は、当初開業していたこともあり、やはり河本ら、アカデミアのヒエラルキーの頂点に君臨した東京大学の権威者たちからは少し心理的な距離があったものと思われま。これに比して、大西克知に師事した門下の思い出話には、より直接的に大西の人格が滲み出ています。昭和41年5月の第70回日本眼科学会総会が開催された際、刊行された『大西克知先生御生誕百年記念誌』で、門下の思い出を辿ることができます。多くの門弟や知人、友人が大西克知を偲んで、思い出を語っていますが、いずれの文章にも、直接・間接さまざまな形で、彼の偉大さを認めるとともに、伝説化していた“変人奇人ぶり”，もしくはその解釈に言及しており、周囲の人間にとって余程印象的な人物であったことがよく理解できるのです。

例を挙げると、門弟が恩師大西克知を評して曰く、「大西先生は知れ切った様なことでも微に入り細を尽くしてトコトンまで掘り下げて行かぬと虫のおさまらぬと言う様な方であった。この為少し世間ばなれがして幾分接近し難い様な一面もあって一部の人には誤解もあった様であるが、実際は実に親切で子供の診療等の時は時間をかけ手を尽くしてああまでせずとも良いのではないかと思われる時が度々あった。斯

様にして先生の一生は数限りのない多くの奇話逸話を生んだのである」(美甘三六「思い出すままに」)。

あるいは、「私の入局した頃は先輩より先生に関して多くの逸話のようなものを聞かされた。しかし話は眼科学者として先生の名声が高いことの他、変人、奇人甚しいのは半狂人と世人が先生を見ていることについてであった」(田村茂美「先生の思い出」)。ちなみに田村は、“軍帽をつけたままで診察に訪れた中将を大喝し、追い返した”，“自宅で怒った時に、屢々妻を便所に閉じ込めて、雪隠詰めにしてから出勤した”，“痲痺で、助手や看護婦を叱りつけて殴り倒し、器具機械を投げつけた”などという伝説めいた風聞を記載していますが、いずれも真偽の程は疑わしいことを指摘し、師を「直情径行、清廉潔白の人であったのを世間は変奇の人のように誤解したのであって、私などは先生の人情味の大変豊かであったことを知っている」と彼の寄稿を締めくくっています。

また門弟のひとり、田原達也も「先生に就て巷間極めて奇行的なエピソードが伝わって有名でしたが、既に御停年近くなられ円満な好々爺(当時としては)となるご年配だったのか、少くとも私の在局中の感じでは其真偽を疑い度い様でした」。さらに「然し何かの機会に医局員と新三浦等で会食される時や御自宅を訪問した時等は教室での先生とは思われない温情ある御話しや、ユーモアもあり、サービス之務められ恐縮やら驚きやらでした」と記憶を述べています。ただ大西克知の本質については、大西自身の言葉として「其御感想を御尋ねした処(俺は人間と話しをするのが一番嫌いだ、それで医者に成って何科をやろうかと考へた時、屍体は物を言わんで解剖学者になろうかと思つたが、解剖では食へんで眼科が面倒が少なくて宜かろうと思つて、眼科医者になりやっとな生涯の嫌やな思いから離れて其目的を達した。)と申されま

した」ということですから、やはり公私の峻別が厳格であり、決して社交的ではなかったことが理解できます(田原達也「先生を懐しんで」)。また曰く、「さて大西先生は奇行に富んだ方だと聞いていたし、私の入局した時既に先生は御退職少し前と言う御年令だったので、その頃は伝説化していたのではないかと思われることなど先輩から聞かされました」(山際源一郎「先生と伝説」)。

以上、多くの門弟達が語る大西克知像は、公務にあたっては、きわめて峻厳で恐ろしい師であったことがわかります。そして、決して周囲に迎合することをせず、孤高を恐れず、ただ自らの信じる道を突き進む彼は、時に、周囲の誤解を招き、変人奇人と揶揄されることにもなったようです。しかし、彼がストイックに邁進した学問においては、誰しもが認める偉大な業績を残しています。特に、日本眼科学会の創設と日本眼科学会雑誌の刊行については、彼の奮闘なくしては、あれほどの早い時機に実現をみることはなかったでしょう。他方、私的な場面での大西克知は、優しく門弟や家人に接しており、公私の峻別を自らに課していたことがわかります。私の受けた印象がおそらくはそれほど見当外れでないことは、大西克知の友人であった久保猪之吉が、次のような、愛情の籠もった批評をしていることで理解できると思います。「自尊心ガツヨク負ケ嫌ヒデ、独立独行主義デアツカラ何モノヲモ、誰ヲモ恐レナカッタ。偽善ヲ悪ミ虚飾ヲ嫌フコトモ強カッタ。ソコデ思ツタコトヲ遠慮ナシニ披瀝シ時ニハ他人ヲ面罵スルコトモアツタ。シカシ君ノ批判ハ私ガナイカラ正確ナコトガ多イ。即チ忌憚ナキ批判者デアツタ。君ノ性格ハ人ニ依頼スルトイウコトモナク人ヲ信用スルトイウコトモムツカシカッタ。此点ハ立派ナ所デアツタガ又世人カラ真ノ理解ヲウケエナカッタ原因デアツタト思フ。従ッテ友人ハ少ク孤立ヲ楽シンデ居ツタ風ニ見エタ。

シカシ君ノ半面ニハ非常ニ情ニ厚イ美シイ所ガアツタガ、此半面ハ容易ニ人ニ知レナカッタ」(久保猪之吉「大西君の頭と花」)。

おわりに

大西克知の生涯と業績、そしてその人物評を俯瞰すると、日本眼科学会と日本眼科学会雑誌の存在が、このきわめて興味深い先達の奮闘による成果であることが理解できます。彼の尽力がなければ、日本眼科学会の設立は、もっと遅れていたであろうと思われまじ、そのあり方も変わっていたと考えます。河本重次郎とその門下が、帝国大学の権威を有し、絶大な影響力を行使する時代の中で、独自の路線を歩んでいた大西克知とその開業医仲間が、河本重次郎を説得し、日本眼科学会の設立に到達し得たことは、大きな意義を有すると思うのです。東京(帝国)大学の一極集中を回避し、次世代の学問体系が発展していく揺籃は、多彩な背景を持つ眼科医たちの切磋琢磨が必要であったと考えるからです。その観点からは、大西克知の情熱が帝国大学の権威を突き破って、新しい時代の突破口を切り開いたといえます。表層的な社交を嫌って、純粋な思考を突き詰めていった大西克知の学者としての有り様には、非常な魅力を感じます。一旦、東京で開業しながらも、古き良き時代の「象牙の塔」の中に、自らの居場所を見出した純粋な学者の極北としての大西克知の生き様は、確かに河本重次郎が評したように「結晶」という表現が正鵠を射ているように思います。「ドウモ結晶ト伝フ評ガ一番ヨク合ッテ居ル人デアリマス。何處マデモ結晶シテ居ル人ダト思フ」という河本重次郎の大西克知評は、初見ではやや冷めた立場からの人物評であるように感じたのですが、大西克知の本質は、公私の峻別の中で、学者としての人生を細部に至るまで極めようとしていたことにあるように思い

目次

ます。孤高を恐れず、誤解を避けようともせず、自らの信じる道を突き進んだ直情径行の彼であるからこそ、あれほどの功績を残せたのでしょう。それが「結晶ハ細イ所マデ結晶シテ居ル」大西克知の人生だったのです。

〔謝辞 本稿においては、和歌山県立医科大学名誉教授 大西克尚先生によるご助言とご支

援を賜ったことを深謝いたします。また本企画では、歴史上の事柄を、できるだけ一次史実を引用して記載したいと思いますので、原則として敬称略とさせていただきますことをお断りしておきます。〕

〔谷原秀信：熊本大学大学院生命科学研究部眼科学分野〕

*

*